

十二年八月十四日夜、鈴木副官（現岡村さん）よりダモイ命令が知らされる。日本に着くまであてにならない？ 冬枯れの始まった三〇一を後にダンプカーに乗せられ貨車に乗せられコムソモリスクを通り、果てしない草原、木も見えない広野に出る。所々に牛の群れ、干草を作る農夫が見えた。

ハバロフスクを通りナホトカ港に向かって旅をする、着くまで期待できない旅である。無事港に着いた。九月に入るとだいぶ寒くなってきた。十日くらいして信濃丸が迎えに来て乗船し、初めて日本に帰れる実感、がしてナホトカ港に別れを告げ舞鶴に向かって出航、九月十一日舞鶴上陸。佐渡おけさに迎えられて。

九月十八日晴れの日、母兄姉の待つ我が家に。その日は村のお宮の秋祭りであった。

シベリア抑留の思い出

新潟県 佐藤 武雄

昭和十九（一九四四）年徴集、同年一月二十日新発田十六連隊に入隊。一週間後列車と船で北朝鮮会寧部隊に到着する。

会寧にて教育を受ける。中隊長は原島大尉だと記憶しております。

七月頃旧ロシアとの交戦あり。重機を持って農家に泊まる。翌日命令により中隊に帰れと言われ中隊に帰ったところ、中隊は司令部に入る穴を掘っていた。昭和二十年八月終戦となった。

自動車と列車を乗り継いで一週間くらいかかり三〇一収容所に到着した。冬のため作業はだいたいの薪集めや各部屋の修理で終わる。また建築、鉄橋等のセメントの型枠作りやシベリア鉄道を作りレールの高低の修正などをしていった。コムソモリ

スクに来て最初から最後まで三〇一収容所で約三年おりました。コムソモリスクでの作業はレンガ造りの三階建てと、その内装仕上げにあたる。ここで約七カ月過ごし、その後約一カ月くらい講習に行き、昭和二十四年八月二十一日興安丸にて舞鶴に入港、三日後、昭和二十四年八月二十四日無事故郷に帰りました。

シベリアの思い出

新潟県 小菅 稲秋

あれはシベリアに連れて行かれた翌年（昭和二十一年（一九四六）年）の三月初めの頃と思う。

我々の屋根のない宿舎に合掌が組まれ、宿舎の脇から掘り上げた土が、天井裏に敷き詰められた。

ステイリーカチゴリー（身体検査の三級者）の営内軽作業は「高橋小隊、今日は宿舎の木羽打ち

だ」と、朝の整列後に説明があった。

カンボーイ（銃を持ったソ連の兵隊）がいないから「ダバイ、ダバイ」と言われない「今日は助かった」と内心想った。機材庫へ金槌と釘を取りに行く者、穴のところに薪を集めて燃やす者など手分けして動き始めた。三十四、五人の小隊だったと思う。金網らしき物は五個ほどあったが釘がない。木羽もない。仕事ができないから皆で暖まっていた。小隊長が木羽板を持ってきたが、釘が無いので仕事ができない。マイナス三〇度ほどの寒さだ。午後三時を過ぎた頃、薄暗くなったが《黒皮ジャンパー》はロシアの収容所所長が来たのが判ったので急ぎ火を消した。「オンチェル！ポチカ・ニーラボート！（小隊長！なぜ、働かないのか！）」《黒皮ジャンパー》はカンカンになって小隊長を叱っている。小隊長は釘が無いのと、寒いと言いつけているようだ。「ザクリ・チョネ！（営倉入りだ！）」《黒皮ジャンパー》は小隊長に営倉入りを命じた。